

記述完成

I

はじめに――

本書は、小学生の記述力、ひいては国語力を伸ばすために書かれたものです。

記述力をつけるためには、書く「こつ」を習得し、トレーニングを重ねることが必要です。「芸術は模倣から始まる」という言葉があるように、正しく美しい日本語を書くためには、お手本となる文（文章）を筆写することから始め、文を作る上でのさまざまなきまりを学びつつ、自分なりの文を書いていく訓練をしていかなければなりません。

本書では、トレーニングAで、日本語の文を構築するための基礎訓練を行い、トレーニングBで、読解をまじえながら自らが文を作り、書く訓練を行います。トレーニングBでは、すぐれた作家の名文を数多くのおせており、そうした文章にふれることも、記述の上達につながりますので、じっくりと読みこんでから問題にあたってください。

何事も積み重ねが大切です。一步一步、着実に訓練を重ねていきましょう。

第1課

(学習日 月 日)

■ トレーニングA ■

一、次の文を筆写しなさい。(ますの一字目から書くこと。)

① 太郎たろうは、母の心配をよそに、毎日野球に明けくれている。

② 世の中とはよくしたもので、助けてくれる人が現あらわれた。

二、次のことばを意味が通るようにならばかえて文を作りなさい。(文末に「。」をつけること。)

① なることだ 画家に ゆめは わたしの

② おこられたので 悲しくて 父に 泣ないた

③ やんで 出した 顔を 雨が 太陽が

■ トレーニングB ■

ポイント

- ★「どんなこと？」ときかれたら、「……こと。」と答える。
- ★「……こと。」にうまくつながるよう、日本語に注意する。

例題

きのう、私は母にしかられた。しかし、次の日の朝、私は、そんなこともわすれて、元気に学校に行った。

(問い) — 線 「そんなこと」とは、どんなことですか。

(解答例) きのう、母にしかられたこと。

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

つぎの日には、ごんは山で、くりをどっさりひろって、それをかかえて、兵十の家へいきました。

うら口からのぞいてみますと、兵十は、昼めしをたべかけて、ちゃわんをもったまま、ぼんやりと考えこんでいました。へんなことには、兵十のほっぺたに、かすりきずがついています。

(新美南吉『ごんぎつね』)

問い — 線 「へんなこと」とは、どんなことですか。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いわし売りは、いわしのかごをつんだ車を道ばたにおいて、ぴかぴか光るいわしを、両手でつかんで、弥助の家の中へもってはいました。ごんは、そのすきに、かごの中から五、六びきのいわしをつかみ出して、もときたほうへかけだしました。そして兵十の家のうら口から家の中へいわしをなげこんで、あなへおかけてかけもどりました。とちゅうの坂の上でふりかえってみますと、兵十がまだ、井戸のところであをといでいるのが小さく見えました。ごんは、うなぎのつぐないに、まずひとつ、いいことをしたと思いました。

(新美南吉『ごんぎつね』)

問い — 線 「いいこと」とは、どんなことですか。

第2課

(学習日 月 日)

■ トレーニングA ■

一、次の文を筆写しなさい。(ますの一字目から書くこと。)

① 母は、ことあるたびに、私が幼おきないころの話をする。

② 日曜日の午後、私は一人、部屋でひまを持てあましていた。

二、次のことばを意味が通るようにならばかえて文を作りなさい。(文末に「。」をつけること。)

① 持ってきた 少なかった お弁当べんとうを 人は

② 指していた かけた 二時を 時計は かべに

③ おじから 住む 来た 一通の 北海道に 手紙が

■ トレーニングB ■

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

天気は冬が来る前の秋によくあるように、空のおくのおくまで見すかされそうに晴れわたった日でした。ぼくたちは先生といっしょに弁当をたべましたが、その楽しみな弁当の最中でも、ぼくの心はなんだか落ち着かないで、その日の空とはうらはらに暗かったです。ぼくは自分一人考

えこんでいました。だれかが気がついて見たら、顔もきつと青かったかもしれません。ぼくはジムの絵の具がほしくてほしくてたまらなくなりました。胸がいたおほどほしくなりました。ジムはぼくの胸の中で考えていることを知っているにちがいないと思って、そっとその顔を見ると、ジムはなんにも知らないように、おもしろそうに笑ったりして、わきにすわっている生徒と話をしているのです。

（有島武郎『一房の葡萄』）

問い —— 線「ぼくの胸の中で考えていること」とは、どんなことですか。

二、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ぼくは急に頭の中が氷のように冷たくなるのを気味悪く思いながら、ふらふらとジムの卓の所に行き、半分夢のようにそのふたをあげて見ました。そこにはぼくが考えていたとおり、雑記帳やえんぴつ箱とまじって、見覚えのある絵の具箱がしまっていました。なんのためだか知らないがぼくはあっちこっちをむやみに見回してから、手早くその箱のふたをあけて藍と洋紅の二色を取り上げるが早いか、ポケットの中におしこみました。そして急いでいつも整理して先生を待っている所に走っていききました。

ぼくたちはわかい女の先生に連れられて教場にはいりぬいめの席にすわりました。ぼくはジムがどんな顔をしているか見たくってたまらなかつたけれども、どうしてもそっちの方をふり向くことができませんでした。でもぼくのことだけをだれも気のついた様子がないので、気味が悪いような安心したような心持ちでいました。

（有島武郎『一房の葡萄』）

問い —— 線「ぼくがしたこと」とは、どんなことですか。